

---

# ニセニセイギ

ムレナシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ニセニセイギ

### 【Zコード】

Z3094F

### 【作者名】

ムレナシ

### 【あらすじ】

干渉力　それは世界に干渉する力。親友の幼馴染である黒女笑顔という名の女子に絶賛片思い中の主人公は、黒女笑顔がチヤラ男に絡まれている現場に遭遇する。そんな美味しい場面を主人公が逃すはずは無く、颯爽と助けに行くのだが……。裏の世界へと巻き込まれていく主人公。黒女笑顔　闘う日本人形。

## 第1章「黒女笑顔」・第1話「黒女笑顔」（前書き）

初めまして、ひいとと言います。宜しくお願ひします。  
書くからにはそれなりのものを書きたいとは思っていますが、趣味  
で書いているので横着な部分もチラホラ出てくるかと。そういう部  
分は指摘してくれると嬉しいです。初作ですので、書きながら出来  
るだけ成長したいと思っています。  
設定がまだ固まってるとは言いがたいので、大幅に変更することも  
あるかもしれません。  
次回更新予定日不明。

## 第1章「黒女笑顔」・第1話「黒女笑顔」

ぼくはおひめさまをまもるきしになる。  
わたしはおひめさま。きしさんにまもつてもりつおひめさま。

**黒女笑顔。**名前に反してその笑顔は、正に清純な乙女のそれ。も  
しその天使のような笑顔が作られたものだとしたら、正に黒女笑顔  
という名前の通りではある。黒女笑顔が黒女笑顔であるなれば、大  
半の人間は人間不信に陥ってしまうだろう。周囲には、黒女笑顔は  
全く黒女笑顔の姿を見せない。名前から黒女笑顔を疑つてしまつて  
いるとはいえ、黒女笑顔はやはり完全に黒女笑顔ではないのかもし  
れない。

**黒女笑顔。**クラスメイト。親友の幼馴染。たまにツンデレ。俺の  
通う高校のアイドル。恐らく無意識に、天使の微笑みで思春期真っ  
盛りな男どもを魅了している。無論俺もその一人だ。ただ、無意識  
であると断定できないのはやはり黒女笑顔という名前のせいである。  
全く彼女の両親は何を考えて黒女笑顔という性質からはほど遠い彼  
女に黒女笑顔という名前を与えたのだろうか。あるいは、黒女笑顔  
という名前を付けられたせいで逆に彼女のよう女性となつたのかも  
しれないが。

**黒女笑顔。**ニット帽愛好家。身長はかなり小さい。そして胸はで  
かい。つまりはロリ巨乳のジャンルである。黒い長髪と黒い一重の  
瞳。白い肌。真っ赤な小さな唇とほんのり赤い頬。整った鼻。その  
小さな身体と腰の辺りまで伸びた潤つた黒い長髪と余りにも可憐な  
顔は日本人形を想像させる。美しさ、可憐さ、優しさ。そして恐さ。  
正に動く日本人形。生ける日本人形。人間人形。人形人間。ニット  
帽を被つた現代版日本人形。黒女笑顔。黒い髪が似合う笑顔の女。  
それとも、黒い笑顔を持つ女。

**黒女笑顔。**剣道部所属。むさ苦しい男どもの群がる地獄に咲く一

輪の花。運動神経抜群な彼女の剣道の腕は、男子を含めても部内でトップである。だけど一度も大会には出ない。ちょっとした事情がある。無論、彼女が大会に出てしまえば実力も見た目も最上級、ハイエンド級なので騒がれてしまうのは間違いないのでそれを避けてのことかもしれない。本能的に彼女もそれを分かつてているのだろう。あるいは、彼女が黒女笑顔なれば意識的にそれを理解しているのだろう。闘う日本人形。侍ガール。

黒女笑顔。彼女はその美しさゆえか、ナンパやストーカー、強姦の類に良く出会う。それらを防ぐために彼女は剣道部に入り、外ではいつも竹刀を携帯している。彼女は竹刀で獣と化した男どもを追い払えるようになつたが、いつのまにか彼女の剣は剣道をするため剣でなく人を殺すための剣となつてしまい、そのせいで彼女は大会には出ないようにしているらしい。強者と試合すると無意識のうちに人を殺す剣になつてしまふかもしれないからだそうだ。無論人を殺すための剣というのは、彼女が言葉の綾で言つただけだろう。

黒女笑顔。容姿端麗。頭脳明晰。運動神経抜群。純粋無垢。はつきり言つて はつきり言わずとも完璧である。完璧は人を遠ざける。完璧すぎるものは恐ろしい。しかしながら、彼女が偶に見せるドジつぶりが周りにその恐さを感じさせない。完璧じやないからこそ完璧以上。完璧異常。もし彼女が黒女笑顔であるなれば、意識的にそれを装つているのかもしれないが。

黒女笑顔。黒女笑顔であることを見つめずにはいられないほどに魅力溢れる彼女ではあるが、やはりそろそろ黒女笑顔疑惑について考えるのは止めようと思う。黒女笑顔という名は彼女の責任ではないのだ。彼女を疑うこととは彼女に失礼であるし、俺にはそんな資格はない。とは言つても人間誰しもが善と惡の部分を持っている。彼女はきっと黒女笑顔ではなく、黒女笑顔もある。何だから言つても黒女笑顔疑惑を捨てきれずに彼女を疑つてるのは、彼女の魅力が凄過ぎるからな訳ではない。今となつては本当か幻か自信がないけれど、俺は一度 というか今日、黒女笑顔に出会ってしまった

からだ。そして黒女笑顔な彼女も良いと思う心が芽生えてしまったからだ。人間誰しもが善と悪の部分を持つていて、人間誰しもがSでありMである。奴隸少女黒女笑顔。女王黒女笑顔。

黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。黒女笑顔。

黒女笑顔。

黒女笑顔。絶賛片思い中の相手。

黒女笑顔。そして今俺の隣にいる女性。恋人や将来の伴侶などの意味で隣にいるのならば嬉しいけれど文字通り隣にいるだけ。夕方、偶然帰り道に通り過ぎる公園で彼女が所謂チャラ男に絡まれていたので、俺は颯爽と現れ彼女を助けて、今そのお礼にとジュースを奢つてもらつて公園のベンチに一人で座つて会話をしている 無論、嘘だ。

黒女笑顔。彼女は闘う日本人形。

「嫌がつてんだろ。離せよ」

黒女笑顔を掴むチャラ男の手を無理矢理離した俺の言葉にチャラ男は睨みを返す。それだけ たつたそれだけで。お姫様を守る騎士になつたような気がして少々悦に入つっていた俺は、現実へと引き戻される。本能で理解する。こいつはただのチャラ男ではない本物であると。

「つ……」

言葉が出ない。足が震える。

「今は機嫌が悪くない。見逃しキャンペーン中。すぐに失せるなら見逃してあげるよ」

チャラ男はおちよくるような口調で、チャラ男は随分とチャラ男のように楽しそうな、卑猥な笑みを浮かべる。

「んなこと……」

ムカつく。選択肢は二つ。逃げるか 闘つか。究極の選択でも何でもない。俺には黒女笑顔を見捨てて逃げるなんて選択肢、選べるはずがない。

「出来るわけねえだろうが！」

叫ぶ。震える足を動かすために。俺の右の拳に全てを込めるために。全身全靈。全体重を右の拳に。全ての思いを右の拳に込めて、チャラ男に殴りかかる。

溜め息。チャラ男は溜め息をつく。その溜め息一つで、俺が圧倒的下位存在に感じる。恐いし勝てないかもしない。だけど 黒女笑顔を守るためなら俺は絶対に負けはしない。

ぐつ。俺はそんな言葉を発して倒れる。俺の渾身の右ストレートは、その思いも重さもぶつけることなくかわされ 挙げ句その思いも重さも逆に利用された。カウンター。チャラ男は、俺の拳を避け、掌で俺の顎を突く。これが掌底つてやつなんだろうか なんて考えながら俺は無様にも倒れた。頭も身体も正常に働かない。絶対に負けない 笑ってしまう。無様にも、完璧に負けてしまった。ただこの場合、気絶しなかつただけでも十分及第点じゃないかと思う。及第点。確かに及第点だけど、全く意味がない。結果として黒女笑顔を俺は守れなかつた。騎士にはなれなかつた。

「お姫様が悪い男に攫われちゃうよ。守らなくて良いのかい？」

チャラ男が、正しくチャラ男のように騎士になれなかつた俺を笑う。

どうすればいい。喋ることすら出来ない。

「お姫様。従わないならこの騎士が どうなるか。分かるよね？」

助けに来た俺が、俺が人質に取られるなんて。なんたる滑稽。無様。

溜め息。黒女が溜め息をつく。その溜め息一つ。チャラ男より少し小さな溜め息一つ。俺は、力の無い自分を悔やんだ。黒女は、俺のせいで男に従わざるを得ない。俺のことは気にしなくて良い。そう叫びたいが言葉が出ない。それに、その言葉の通り気にしない人なんてそういうはない。

「ほんとに、廻は馬鹿なんだから」

うみせ  
海瀨廻。<sup>まわり</sup>

何を隠そ<sup>う</sup>う俺の名だ。黒女は俺の名前を呼びながら黒女笑顔といふ名とは正反対の笑顔を見せる。毎度ながら俺をときめかせる可愛い笑みだ。

黒女は背中に担いだ竹刀を竹刀袋から取り出して構えながら、正に黒女笑顔の名の通りな笑みを見せる。文字通り、危険な笑み。はつきりしていなかつた俺の頭は、完全に覚醒する。ぼおーっとしていた身体が、今はゾクゾクする。やばい。俺はコロンブスの「」とく新世界を発見した。

「覚悟なさい」

一言。凛々しく一言。人質であるはずの俺のことなど関係ないような一言。その言葉が俺に向けられたものでなく、チャラ男に向けられたものであることに嫉妬する。その笑顔も、その言葉も俺だけのものなのに……。って違う。違う違う。なんて破壊力抜群な黒女笑顔なんだ。思わず変態になるところだつた。

羨ましくも黒女笑顔の笑みと言葉を向けられたチャラ男は、へえと感心したように笑いながら構える。俺のときには構えなかつたくせになんて愚痴を言いたくなるが我慢する。

静寂は一瞬。一瞬の後、共に動く。どちらが先に動いたかなんて俺にはわからない。

黒女笑顔は竹刀。チャラ男は素手。剣道三倍段。そのハンデは大きい。チャラ男はそのハンデがあつても勝てると思っているのだろう。だが、チャラ男よ侮るなれ。黒女笑顔の剣は、剣道のための剣ではない。人を殺すための剣である。

勝負は一瞬。剣道には下半身に対する攻撃がない。チャラ男は黒女笑顔の面打ちを避けて足を蹴つた。黒女笑顔が只の剣道少女なら確実に勝負はチャラ男の勝ちで決定していただろう。しかし、黒女笑顔は只の剣道少女ではなく、侍ガール。そして闘う日本人形。今更ながら、俺が助けに入る必要なんて無かつたんだと気付かされる。助けに行つたときは彼女が闘う日本人形であることを完全に忘れていた。

チャラ男の蹴りを横に移動して避ける。華麗な足さばき。蹴り。

リーチは長く破壊力も高い。しかし蹴った瞬間、己の身体を支えるのはもう片方の足だけ。そんな状態で黒女笑顔の剣を避けれることはなく、チャラ男は黒女笑顔の面打ちを見て頭を腕で防ぐ。面打ち。二度目の面打ち。剣道のルールに則った攻撃。しかしチャラ男は気付くべきだった。只の剣道少女。剣道以外に剣を使ったことのない者には、ルールには関係のない蹴りなど避ければずもないことを。黒女笑顔は剣道のルールに縛られていることを。試合ではなく本物の経験者であることを。ルール無縁の黒女笑顔が、当然二回もルールに則った攻撃するのは全くもって可笑しいことを。一回の面打ち。これは黒女笑顔がルールに縛られていると錯覚させる黒女笑顔の作戦。チャラ男は見事にその作戦に引っかかっていた。頭だけを防御していた。一度目の面打ち。それはフェイク。フェイント。何の防御もしていらない人体の急所の一つ、鳩尾に強烈な突きを放つ。防御不可能。そして片足が浮いてるが故に回避不可能。服で場所が良く分からぬ鳩尾を突けるのはさすが闘う日本人形と言つたところか。

チャラ男の顔は驚愕と痛みで歪み、前のめりになる。俺なら間違いない死んでるであろうに、氣絶すらしないとは敵ながらに少し尊敬してしまう。まだ意識のあるチャラ男を黒女笑顔が見逃すはずもなく、黒女笑顔は追い討ちをかける。面打ち。三度目の面打ち。そして正真正銘の本気の面打ち。言葉に表せない謎の叫び。恐らく、面と言つているのだろうが俺には分からないと共にチャラ男の頭が竹刀で叩かれる。叫び声の中に、鈍い音が微かに聞こえたのは気のせいだと信じたい。そして、華麗な残心。完璧である。まじで惚れ惚れする。闘う日本人形の名は伊達じやない。

倒れたチャラ男 多分再起不能だろう を無視して、倒れている俺の元に黒女が近づいてくる。いつのまにか竹刀は背中に担いでいて、いつのまにか黒女は黒女笑顔の名が表すそれとは正反対になっていた。

「帰るよ」

早く立ちなさいと少しきつい口調で言いながらも、優しく手を差し伸べてくる黒女。ツンデレである。頭も身体も完全に覚醒させられてしまつたので、手を掴んで起き上がる。よろめく振りして抱きつこうとも思つたが嫌がられそうなので止めておく。起き上がつたらすぐに手は離される。もう少し手を繋いでいたかった。

黒女の手の余韻に浸つていると、呻き声が聞こえる。出所はチャラ男。あれだけの攻撃をくらつてもまだ意識があるのは真に敵ならあつぱれだ。チャラ男はようめきながらも立ち上がる。

「女つてのは恐い生きモノだねホント」

溜め息。チャラ男、本日一回目の溜め息。下を向きながら溜め息をついていたチャラ男が顔を上げる。

「覚悟しろ」

殺意。殺意なんて物は今まで感じたことはないが、恐らくこれが殺意といつもの。足が震えてすらくれない。蛇に睨まれたように全く身体が動かない。こいつはチャラ男ではなく本物だ。その言葉を発した俺こそはその言葉の意味を全く分かつていなかつた。だけど今分かつた。平和ボケした俺とは違つて黒女笑顔には殺意なんて意味が無い。当然、竹刀を抜き止めを刺しにいく。

待て。何かヤバイ。チャラ男から何か 何かヤバイ気配がする。チャラ男の突き出した右手の周りに薄つすらとした青いモヤが見える。言うなればオーラのような

「待て黒女！」『アレ』はヤバイ！

全速力。過去最高のスピードで黒女笑顔の元へ駆けて行き、黒女笑顔を無理矢理倒してチャラ男の右手の延長線から避ける。

「ちよつ！」

「いっ……」

何が起きたか分からず思わず声が出た黒女笑顔に、鋭い痛みで思わず声が出た俺。

全く理解不能だが、青いモヤを纏つた右手から何かが飛んできて

ギリギリ避けきれず脇腹をかすつた。脇腹が綺麗に切れている。

チャラ男は、へえと感心したように笑う。その笑みさつきも見たぞ畜生が。

「廻！」

「大丈夫。かすつただけだ」

そう、かすつただけ。なのに結構痛い。

「お前何をした」

「何だと思う？」

ニヤニヤとチャラ男は笑う。分かる訳ねえだろボケが。チャラすきんだよ！

「ふざけるな」

俺はチャラ男を睨む。多分今の俺の目には殺意がこもっているはずだ。

「頑張つた」こ褒美に教えてあげる。これはね干渉力と言われていて、単純に言うと魔法とか超能力みたいなものだよ」

ふふと笑いながらチャラ男は言う。

「君にはこの力場が見えたんだね」

チャラ男は右手に青いモヤを左手で指差しながら言つ。

「ならもうすぐ、君も干渉力を使えるようになるはずだよ。もつとも」

チャラ男が右手を俺の方に向ける。

「君はここで死ぬんだけど」

身体に衝撃がくる。痛みはない。衝撃が来たのは前からではなく横から。横 黒女笑顔のいる方から。黒女笑顔から小さな呻き声が聞こえる。俺と同様、脇腹にかすつただけ。倒れた俺とチャラ男に立ち向かう黒女笑顔。

「今更だけど、出来るだけ君を傷つけたくないんだよ」

チャラ男は、黒女笑顔に語りながら右手を向ける。

右手から高速の水が飛び出す。ウォーターカッター。

脇腹ではなく黒女笑顔のお腹を貫通する。

血。血。血。黒女笑顔は倒れる。

「く、黒女……」

殺す。純粹なる殺意。チャラ男に対する殺意。

チャラ男は再び右手にモヤを力場を作る。

「あああああああつ！」

意味も無く叫ぶ。叫ぶことでチャラ男の水を跳ね返すことなど出来はない。

「なつ……」

しかし しかし跳ね返った。

否、跳ね返した。叫んだお陰で跳ね返った訳ではなく跳ね返した。チャラ男の水を跳ね返す まるで超能力みたいに。そう。チャラ男は自分の発した言葉の意味を全く分かつていなかつた。もうすぐ俺も使えるようになる。干渉力。

あらゆるものを廻す力。それが俺の 海瀬廻の干渉力。  
跳ね返した。つまり半回転。180度回転。そして跳ね返した水はチャラ男の左足に当たる。

理解不能。そんな顔している。それとも、もうすぐ使えるとは言つたものの、まさかこんなタイミングで使えるようになるとは思つていなかつたのか。

「甘いぜチャラ男」

今の俺はこの上なくシニカルな笑みをしていに違いない。

「俺は負けない」

黒女笑顔を守るために俺は絶対に負けはしない。

ちつ。チャラ男の舌打ちが聞こえる。

廻す。今のところ俺の攻撃手段はチャラ男の攻撃を利用するだけ。チャラ男は俺の干渉力が跳ね返す力だと思っているはず。ならばその認識の違いを利用する。

不意に全身に感じる寒気。全身が発する危険信号。俺の周囲に青い力場。防御のために俺と黒女笑顔を囲むように張っている俺の力場も青いがこれは俺の力場ではない。色は似ても全く異質の力

場。 チヤラ男の力場。 僕が張っている力場の中には力場を張れないみたいだが、俺の力場の周りは完全にチヤラ男の力場で囲まれている。

黒女笑顔が只の剣道少女を装つた。 僕が干渉力を跳ね返す力と誤魔化している。 ならばチヤラ男の水も、 右手からしか出せないなんてことはない。 手加減。 僕達に対して手加減していたのだろう。しかし俺が干渉力を使えるようになつては、 条件は対等。 手加減しての余裕など存在しない。 想像するに、 力場から高速の水を発射する力。 それがチヤラ男の干渉力。

力場から、 チヤラ男の青い力場から高速の水が、 全方位から水が発射される。 その全てを跳ね返す。 しかし、 たまに跳ね返せないものもある。 干渉力の処理能力の限界つてやつと、 跳ね返す意志が無いと跳ね返らないのが理由だろう。 力場が全自动で跳ね返す訳ではない。 力場に跳ね返す意志を込めて初めてその力が作動する。 力場そのものの効果は相手の力場の侵入を防ぐだけ。 と言つても自分達に当たる範囲の水を優先して跳ね返すことは出来るために、 全方位水弾は脅威にはならない。

チヤラ男もそれを悟つたのか力場が消える。

チヤラ男の目に前に力場が現れる。 今までとは違つ。 ドス黒いならぬドス青い力場。

さつきの攻撃でチヤラ男は、 僕の能力の限界を悟つたのだろう。 多分それには力場の強さも関係してくる ような気がする。 今俺は干涉力に目覚めたばかりで力場の使い方も余り分からぬ。 故に、 チヤラ男の全力の力場で攻撃されたなら跳ね返せるかどうか分からぬ。 チヤラ男もそう考えたに違ひない。あのドス青い力場による攻撃は跳ね返せる自信がない。

「ほんと、 驚かしてくれるね君達は」

溜め息。 チヤラ男三回目の溜め息。 手の平を閉じた右手を俺の方に向ける。

「これで終わりだよ

チャラ男は、閉じた右手を開く。同時に、力場から高速の大量の水。

「ああ、俺の勝ちだ」

チャラ男は俺の干渉力が跳ね返すものだと思つてゐるはず。ならばその認識の違いを利用する。そう、チャラ男は俺が水を跳ね返すしかないと思つてゐるが、何も水を跳ね返す必要はない。水を少し廻すだけで俺には当たらない。

しばらくすれば力場は回復するだろうが、今のチャラ男にはもう力場を出せないだろう。チャラ男の周りには力場がない。つまり、俺の力場がチャラ男を包むことが出来る。

俺の干渉力は、あらゆるものと廻す力。

その対象は無論 人体も含まれている。

例えば胴体を捻じれば、一瞬でチャラ男は死ぬ。人を殺す勇気なんてある訳も無い。しかし、黒女笑顔を傷付けたチャラ男を許せば、はずもなく、両腕を廻した。

ポキュキュリ。そんな軽快な音が聞こえた。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐぐんあああああああ」

自業自得だよチャラ男。黒女笑顔を傷付けて良いのは俺だけだ！

…って違う。違う違う。

もう完全にチャラ男は終わつた そう一瞬油断した。

周囲に力場が展開される。俺ではなくチャラ男の力場が。チャラ男は限界だつた。確かに限界だつた。チャラ男。恐らく俺が痛みで限界以上の力場を引き出させてしまった。

ヤバイ。俺もそろそろ限界が近づいている。逸らすだけだつたとは言え、目覚めたての干渉力で相手の全力を防ぐために相当浪費した。多分もう防ぎきれない。ならせめて、せめて黒女笑顔だけでも

「黒女！？」

消え……いた。周囲の力場も消えていた。

黒女笑顔。闘う日本人形。鳩尾に突き。面打ち。いざれもチャラ

男に決定打を与えることは出来なかつた。三度目の正直。チャラ男は痛みでまともな思考が出来ていない。故に、剣道のルールに則つた場所だからこそ狙わなかつた喉に、突きを放つていた。お腹が痛いのか、今回は叫ばなかつたみたいだが。

力場から察するに完全にチャラ男は気絶したみたいだ。喉を本氣で突かれて何で息出来るかは甚だ疑問だが、一応息はしているので死んではない。本当に、敵ながらあつぱれなタフさだ。

「ていうか、どうやつて？」

当然の疑問。黒女笑顔がチャラ男のもとへ走つていく途中で俺は気付くはずだ。気付かないなんて有り得ない。有り得るとしたら、「まるで超能力みたいな」

「そゆこと。お腹にくらつた後にな、私も力場つてやつが見えるようになつて、干渉力が使えるようになるまでじつとしどうつて思つて」

さつき使えるようになったのと微笑む黒女は、やはり可愛い。といふか、チャラ男は可哀相なまでにタイミングが悪いな。

「さて」

黒女笑顔は黒女笑顔の笑みで

「コイツを殺していいもの」

こんな状態になつて尚、俺はチャラ男に嫉妬しなければならない。酷く恐ろしく、酷く美しい笑みを向けられているチャラ男に。

「な、何言つてんだよ黒女。殺す必要なんてないだろ」

「あるわ。はつきり言つて、今回は異常よ異常。干渉力なんてふざけた力が出てくるし。つていうか干渉力つて何よ。干渉力については後々調べるにしても、コイツは、私はともかく廻が干渉力を持つていることを知つているのよ。干渉力と言われているなんて言つてたから干渉力保持者は他にもいるわ。そして、干渉力保持者が集

まったく組織とかがあるはずよ。無かつたらとくにこの世界は潰れてる。多分「コイツもそういう組織の一昧。一匹狼でいれるほどの人物じゃなさそだし。漫画みたいな事言つてるけど、干渉力なんて漫画みたいな 漫画以上にふざけた力がある以上、今までの常識は通用しない。コイツを見逃したら、私達が干渉力保持者であることがバレて、報復されるか組織に勧誘されるかのどちらかよ

「でも…」

「別に廻に殺せなんて言つていねえわ。私がコイツを殺すのよ」

「俺は…」

お前に人を殺させたくない。お前に人殺しになつてほしくない。

「やめろ」

なげなしの力場を展開する。黒女笑顔の皮肉なことに黒い力場に對して何の効果もないが、それでも。

「本気?」

黒女笑顔は、黒女笑顔の笑みを初めて 初めて、俺に向かた。

「ああ」

俺は黒女からどう思われようとも、人を殺す苦しみから黒女を守つてみせる。黒女笑顔を守るために俺は絶対に負けはしない。何があろうとも絶対に負けはしない。絶対に。

「殺さないことでどうなるか、ちゃんと分かつてるの?」

「当たり前だ。だけど、それでも」

黒女笑顔の持つていた竹刀を握む。

「コイツを殺すことは俺が許さない」

溜め息。黒女。本田二回目の溜め息。

「ほんとに、廻は馬鹿なんだから」

黒女笑顔。夕方、偶然通り道に通り過ぎる公園で彼女が所謂チャラ男に絡まれていたので、俺は颶爽と現れて助けるつもりが助けられて漫画以上に漫画みたいな出来事に巻き込まれて。何だかんだで体力の限界で動けない俺を黒女に抱いてもらつて帰宅中である。つ

いでに言つなら彼女はお腹を負傷中。俺を家まで送ったあとは病院に行く予定である。チャラ男は彼女を傷付けたくないと言つていたのは本当のようで、チャラ男の手は細く、しかも切れ味が良すぎるために、そこまで酷い怪我ではない。といつても一応お腹が貫通している。怪我人の女の子に運ばれる男つて……。恥ずかしい。普通逆だろ。彼女の干渉力を使えば一発で帰れそうなものだが、まだその力に慣れていないので例えば俺の身体の半分しか移動出来ないなんてことになるかもしれないために、羞恥プレイを実行中なのである。

「あいつの目的は一体何だったんだ？」

「ん？ ああ、ナンパだよナンパ。あんな強すぎるナンパなんて反則だと思うけど」

笑う黒女は、やはり可愛い。

「ねえ、本当に殺さなくて良かつたの？」

「ああ。ていうかそんな軽々しく殺すなんて口にするなよ」  
軽くゲンコツ。

「もお」

口を膨らませて怒る黒女は、やはり可愛い。

「黒女」

「何？」

首を傾げる黒女は、やはり可愛い。

「確かに、俺の方が間違っているのかもしれない。でも それでも俺はさ、お前に人殺しになつてほしくないんだよ」

「へ？ 言つてなかつたつけ？」

「何を？」

「私はもう」

黒女は、黒女笑顔らしく黒女笑顔らしくない笑みで

「人殺しなんだけど」

勝負に挑む前から負けていたのだった。

黒女笑顔。闘う日本人形。その剣は、剣道のための剣ではなく、

人を殺すための剣である。

家で俺は一人、何度も溜め息をついていた。

「ベラルーリ」

痛！  
お腹二種

痛い。お腹に衝撃。おお。俺のお腹の上に黒女が座っている。しかもパジャマ。ピンクのパジャマに赤いニット帽。良い夢だ。俺の部屋の俺のベッドの上で俺と黒女の一人。ならばすることはない。夢だから何をしても許される。

二〇一九年五月

俺が抱きつけば、黒女は可愛い奇声を発す。ふふ、嫌がっている  
ようで実は喜んでいるに違いない。少し俺の幼馴染を思い出してし  
まつのような奇声だけど。

しかし、ここは俺の部屋だ。もつ逃がさな……俺の部屋？

「うお 現在 空中 僕の家が見える 現在 落丁中

何で嫌な夢なんだ。まあ、夢だから痛くはないだろう。多分、地面にぶつかる直前に目が覚めて、起きたらベッドから落ちているのがオチってところだろう。地面にぶつかったところで夢だから痛くはないはずだ。痛くない？

あれ？ 夢の最初に確かな痛みを感じた気がする。

ドゥサッ。そんな音と共に地面とぶつかった。  
痛い。

しかし、幸運なことに落ちたのは家の庭の花壇だ。正直、コンクリーートだつたら危なかつた。花壇は完全に潰れているが、猫か何かの仕業に誤魔化せるだろう。過去最高の目覚ましを体験した俺にもう眠気など存在するはずもなく、庭に隠してある鍵を使って両親を起こさないように静かに部屋に戻る。

「おい、黒女」

えへへと笑い返す黒女に、俺は毒氣を抜かれて怒りが消える。女の笑み一つで怒れなくなるなんて、本当に男つてのはツラい生き物だ。

溜め息。昨日たくさんついた溜め息を今日もつく。

「でも、いきなり抱きついてくる廻だつて悪いのよ？」

「そ、そりや起きて田の前に黒女がいたら抱きつきたくもなるよ

……」

「もお何それ？」

あははと笑う黒女。

「ていうかお前どうやって入ってきたんだ？」

「忘れたの？」

「ヤリ。なんて音が聞こえそうな黒女笑顔チックな笑み。

「ああ。まるで超能力みたいな

」

黒女のお腹の傷は自然治癒で十分な程に傷は細く小さかつたらし  
い。病院に行つたもののすぐに家に帰つた黒女は一人干渉力の訓練  
をつんでいて、もう大体使えている。ずっと溜め息をついていた俺  
とは全然違う。落ち込む。また、溜め息。

「溜め息ばつかつてると幸せが逃げていくわよ  
まるで子供を相手にしているかのよつに、メツと俺を叱る。うひ  
や。可愛い。

「うつせえ」

「まわりん〜。」はんよ〜「

「ういーつす」

飯の準備が出来たらしい。

「黒女も早く家に戻つて……つてどうした?  
肩が震えてるぞ黒女。

「……」

「おい

「ふ……」

「ふ？」

「ふああひやひやひやつひや」

「うお」

いきなり笑い出す黒女。ていうか何だその笑い方は。少しば女子らしくしる。まあ、でもこんな変な笑い方をする黒女も可愛いんだけど。

「どうした？」

「だつて、だつてだつてだつて、まわりん……ふああひやひや」

「ああああああああ！？」

忘れていた。俺の母さんが何の冗談かいつもまわりんなんて呼ぶことを。というかもう俺の中では当たり前になつていて

「まわりん？ 誰か来てるの？」

母さんが俺の部屋に入つてくる。頼むからまわりんって言わないで。つてヤバい。朝から女子と一人つきりなんて現場見られたら「あれえ？ 誰もいないじゃない。まわりんが女の子連れ込んでるのかと思ったのに」

ぶりつ子ぶるなこのボケ母。

「ていうか母さん。いい加減まわりんつて呼ぶのやめてくれよ」

まじで。頼む。

「ええ～。まわりんはいつまでもまわりんなの」

リアルに自分の母に殺意を覚える。ああ、ワイドショーでキレやすい現代の子供の一人として登場しそうだ。ゲーム感覚で簡単に人を殺したなんて言われるのかもしれない。

つうか、まだ三十三でしかも童顔だからぶりつ子が似合つてるのがまたむかつく。

ぶりつ子な母と会話しながら朝食を取らなければいけないために、相変わらず不快指数の高い朝食だ。

今日は土曜日。学校もない。部活には入つていなかったために自由な時間。今までの俺なら一人寂しくすごしていたが、今日の俺は一味

違う。ふつ。ふははは。今俺は黒女の家で、黒女と一人で激しく汗を流しているのだ。剣道部の黒女だが、わざわざ俺と一人になりたいがために部活まで休んでいる。

そう。汗を……。

激しく……。

「死ぬ……」

修業中である。はつきり言つて、チャラ男に勝てたのは運的要素とチャラ男の油断が無ければ絶対に勝てなかつた。今後同じような事態に巻き込まれる可能性は十一分に考えられるので、修業をしようとという話だ。がしかし、帰宅部の俺。基本的な身体能力がはつきり言つて低すぎるのだ。それに、マトモに喧嘩もしたことがない。弱すぎである。竹刀を持つていらない黒女になら、男と女のハンデ差を利用すれば勝てると思い試合を挑んだが、結果は惨敗。恥ずかしい限り。故に現在、修業という名の虐めをうけている。ちなみに今の俺の服は、ランニングしようと思つて買つたが三日坊主で全然使わなかつた運動用の服だ。そして何故か、黒女は制服の紺のカーディガンと白と黒のチェックのミニスカートに茶色いニット帽に竹刀を背負つた状態。曰く、外でいきなり襲われたときのために、この服で闘うのに慣れたいそうだ。残念ながら、昨日と同様、スペツツ帽被つてたし。良くわからない。でも可愛いから良い。

は穿いている。

俺は尋常じやない程に汗をかいているのに、黒女は全然汗をかない。シャツが透けると思ったのに残念だ。いつも思うけどニット帽の中、蒸れないんだろうか。現在10月の下旬。少し寒くなってきたから大丈夫なのかもしけないけど、夏真っ盛りの時期もニット帽被つてたし。良くわからない。でも可愛いから良い。

「ほら、廻。力場！」

身体能力の向上をはかる筋トレと同時に、力場の修業も兼ねている。力場。如何に自分の力場で相手を支配出来るか。それが干渉者あれから、干渉力保持者のことを俺らは干渉者と呼ぶことにしているが、案外それが正式名称かもしねれない。との戦いにおいて、

一つのキーポイントになる。干渉力。干渉力が使えるようになった瞬間から、何故か使い方は知っている。だけど、知っているだけでも上手くは使えない。故に修業。ま、力場の支配は戦略ゲームみたいなもんなんだけど、黒女は戦略ゲームが大の得意って親友から聞いたことがある。で実際、俺は自分の支配したい場所に全然力場を開拓出来ない。黒女が凄いのか、俺が駄目なのか。

黒女の干渉力は、力場の中に自分がいれば任意の場所にテレポートする力である。弱そうに見えて侮れない。移動する距離に自分の力場の量や強さが関係しても、移動先は自分の力場と全く関係ないのだ。そして力場が足りなくならない限り、普通は戦闘中には自分の周囲に力場を開拓するので　　というかしなければ一瞬で死ぬと思う　　いつでもテレポート出来るということだ。しかも相手の力場の中にもテレポート出来る。そして自分の周囲を力場で囲つたままテレポートするので、相手より自分の力場の方が強ければ、相手のその部分の力場は消える。テレポートするだけで、攻撃能力は全くないけれど黒女笑顔は闘う日本人形で。干渉力を使った勝負も、俺は一度も自分の干渉力を使用することなく負けてしまう。あんなの反則だよ黒女笑顔。黒女より強い力場を開拓していれば、黒女がテレポートした瞬間に黒女に俺の干渉力が使えるんだろうけど如何せん黒女の力場操作技術が半端ない。どう頑張っても防げない。

そう言えば、何でチャラ男はあのとき全力で攻撃してきたんだろう。力場を自分の周囲に開拓出来る程度には、力を残しておくべきだと思うんだけど……。チャラ男は所詮チャラ男だったというところか。そう考えると、干渉者でチャラ男より強いやつなんてごまんといいるのかもしれない。もっと修業を頑張らなければならない。

1時間程修業した後、ちょっと休憩中。ちなみに、修業してる場所は剣道場である。剣道場。そして黒女の家。黒女笑顔。自分の家に剣道場を作れる程の金持ちである。家がでか過ぎる。迷う。トイレ行つたときに、迷つて泣きそうになつたことは秘密だ。そして、散々歩き回つた挙げ句助けを求めるために適当に開けた部屋は、黒

女笑顔のニット帽ルームだつた。腐るほどに大量に飾つてあるニット帽を見たときは正直引いた。しかも、俺を探しにきた黒女にその部屋を覗いているところを見つかってリアルにキレられた。死を覚悟してしまつほどに。普通に泣いたのも秘密だ。微妙に掃除嫌いな上に、自分の部屋とニット帽ルームだけは家政婦さん（家政婦さん！）には掃除させない黒女。そんな黒女の部屋に普通に下着とか落ちてて、それを見ても何の反応を示さないようにニット帽を見られてキレるはどうこうことなんだろうか。まあ、そんな不思議なところも可愛いんだけど。

ていうか。

「黒女。お前、やつぱちよつと強すぎないか？」

「そんなことないって」

海瀬廻くわせ 黒女笑顔。一般的な武器無し干涉力無し勝負。0勝10敗。

力場支配ゲーム。0勝10敗。

何でも有りの勝負。0勝10敗。

俺は弱すぎて、黒女は強すぎる。

「まだまだ。私はまだまだ強くなれる」

いつもの黒女ではなく、黒女笑顔でもなく。まるで恋する乙女のようなそれ。今まで、見たことも無いその表情。何だそれは。俺は知らない。そんな黒女。俺は知らない。つうかどうこうことだよ。強さに恋する乙女つてか？

「これ以上強くなつてどうすんだよ」

溜め息。また俺は溜め息をつく。溜め息癖が出来てしまいそう。

「ひ・み・つ」

恋する乙女のように笑う黒女。可愛い。可愛いけどその笑みの先に俺はいない。つうか。それ以上強くなることと恋がマジで結びつかねえ。もう。俺は、何か勘違いをしているのかもしない。

「廻はもっと強くなきゃダメだよ？ この先何があるか分からないんだから」「

いつもの可愛さを見せる黒女に戻る。この先何があるか分からない。その通りだ。恥ずかしくも俺がでしゃばってしまったせいで、キャラ男を逃がしてしまったのだ。そのせいで、きっと俺達に何かしらアクションを起こしてくれる。強くなれるだけ強くなるに越したことはない。

「分かつてるよ」

「それじゃ、休憩終わり！ 力場も干渉力にも随分慣れたみたいだから次は頭」

「ん？ 何するんだ？」

「力の使い方を考えるの。私のと違つて廻の力は応用し放題じゃないの。廻すなんて一言で言つても、使い方しだいで化けるし肩にもなる」

「具体的にどうするんだ？」

「漫画を読むの」

「ええ。そんなどうでも良いこと……」

「甘い！ 甘いぞ廻くん！ 何度も言つているけど、今までの常識は全く通用しない！ ならその常識を破壊するためにも、自分の世界を広げるためにも異能力バトル漫画を読まなきゃいけないんだよ！」

「な、なるほど」

少しキャラが変わつてゐる気がする黒女。

「私は今から漫画買つてくるから、帰つてくるまで廻はちゃんと修業しとくのよ…」

「ぼつん。テレポートしたのだろう。あんなに元氣有り余つてゐるなら、休憩中に行つてきてほしかったよ。力を使つてるとこを誰かに見つかってしまえい。

まあ、黒女がそんなミスをするはずもなく。というか今のところ、黒女は私有地と俺の部屋でしかその力を使わないし移動しない。無論俺もだ。俺達はもう巻き込まれてしまつた。しかし、俺達が誰かを巻き込むことは防ぎたい。

しかも、ドジを発揮するのは至極どいつもこときだけである。本当に計算でやっているのかもしない。黒女笑顔。恐ろしや。朝、俺の上に落ちたのも失敗したらしいけど、あれもわざとなのかもしない。

修業をサボつているなんて思われたら、殺されるので修業再開。

ぐぬぬぬ。修業中の海瀬廻だ。

「あ」

上から声。上を見上げる。

ぶちゅ。何かが潰れた音と顔面に痛み。

「ありやりや。『め～ん』

謝る気があるのかないのか分からるのは黒女笑顔。そして黒女の足に潰されたのは俺の顔面。本当にわざとなのかかもしれない。それに何でスパツ穿いてるんだよ畜生。

黒女が、重たそうに持っているのは本屋の紙袋。でかい。ああ、黒女は金持ちなんだよな……。推定三百弾ぐらい。どうやって持つて帰ってきた　車で持つて帰つてきたに決まってるか。黒女は金持ちである。

「それじゃ、読むとしますか」

ピーンポン。

「あ、お密さん。廻はそれ読んでて。ちゃんと常識をぶち壊しながら読むのよ」

「…………らじや」

漫画を読み始める。

「え。どうせ微妙だと馬鹿にしてたが、中々どじして」

「お~っす廻」

元気な声が聞こえる。黒女の声ではない。これは

「双槻」  
鶯双槻。俺の幼馴染。幼馴染という羨爛目を抜いても美少女である。茶髪短髪でボーイッシュな美少女。なんていうか妹に欲しいや

しかも、ドジを発揮するのは至極どいつもこときだけである。本当に計算でやっているのかもしない。黒女笑顔。恐ろしや。朝、俺の上に落ちたのも失敗したらしいけど、あれもわざとなのかもしない。

つだ。美少女だけど少々少女すぎるところがある。小学生に間違われて怒っている鶯を良く見る程に。性格も小学生。協調性なし。故に部活には入っていない。といつかソフトボール部を追い出されている。

黒女笑顔と鶯双櫻。我が高校の一大アイドル。奇しくも一大アイドル一人と交友を持つ俺は男子に良く羨まれて優越感に浸ることは多い。黒女笑顔がその美しい容姿と常にニット帽を被つていて」と頭の良さと剣の腕で有名であるならば、鶯双櫻はその可愛い容姿と行動と口調で有名である。爆弾少女。爆弾のように周囲に被害をもたらす少女である。幼馴染としては迷惑な行動ばかりするやつだ。俺の好みとは違うのでどうでも良いが、ボクつ娘である。口癖は「むに」。周囲には萌えキャラとして扱われているが、幼馴染である俺にとつては完全に変質者だ。

ていうかむにむに星人だ。身体は全くむにむにしていないが。むしろツルペタ星人である。

「むに？ 何で剣道場で漫画なんか読んによ？」

「ん~、まあ色々あつて」

ま、確かに剣道場で漫画読んでる男なんて、意味不明だ。

「で、どうしたんだ？ 双櫻」

「廻と笑顔ちんに用があつたんだに。廻の家に廻がいなかつたら笑顔ちんの家に来たんだけど、二人一緒にいたとはねえ。しかもこんなどこで一人つきり。ムフフフ」

「な、なな、何想像してんだよ」

「むに。ボクは応援するんだに。ムフフ」

「その笑い方はやめると言つてるだろ」

女だからまだ許せるとしても、男だったら間違いなく捕まる笑みだぞそれ。無論、口調も捕まるそれである。

「ボクの勝手なんだに」

に~だ、と舌を出す。そこはい~だだと突つ込みたくなつてしまふが無視だ。

「あ～、はいはい」

妙に子供っぽいそれに、思わず手を撫でてしまう。

「む～、子供扱い許すまじ」

むむむと唸る鶯。

「ははは」

「むに～。むにむに」

相変わらず変質者すぎる。正直幼馴染だけどまともに意思疎通を出来る自信がない。むにむに星人。いつも、むにむにしそうな何処かしら愛嬌のあるゲテモノ人形をむにむにしている。

「で、俺に何の用だ？」

「むに。そんのはどうでもいいのだ。ボクも漫画読むの自由奔放。鶯の性質の一つだ。何ていうか、最悪だ。

「じゃ、みんなで漫画タイムだね」

ぐ。鶯のせいでその存在を完璧に忘れていた黒女笑顔だ。正直、鶯がいると余裕がなくなるんだよな。まるで失恋のキューピッドのようだ。鶯双槻。むにむに。

漫画。俺の読んでいる漫画。平凡な高校生が異能力バトルに巻き込まれていく話である。俺もこんなふうに巻き込まれていくんだろうか。しかし、決定的に違うのは主人公がまさに主人公をしているところだろう。俺なんて……。俺が主人公の物語があるとしたら、ひどく情けない物語になるに違いない。漫画の主人公は、見事好きな女を守っている。俺は見事好きな女に守られている。つうか俺、位置的に主人公よりヒロインだよな。キャラクター的に俺の大嫌いな、何も出来ずに守られるだけの役立たずヒロイン。主人公の黒女笑顔に守られる存在。その癖して、無意味な奇麗事で主人公の邪魔をする。まさに俺だ。落ち込む。はあ。溜め息だ。

「むに。溜め息だ。幸せさんが逃げていくに

「ああ。そうだな」

「私のときは「うつせえ」なんて言つてたくせに……」

全然似てない俺の真似をしながら拗ねたように言つ黒女。

「ち、違つよ。」

好きだから逆に爆発しちゃうってやつなんだよ。そんなことさせ  
いたいが、言えるはずもない。分かつてほしい。シンクトレッシュ  
てるような気がする自分が嫌いだ。

「むにに～。ムフ」

鶯がボクは全部分かつているよなんて言いたげな顔をしていやが  
る。お前にだけは分かつてほしくない。

「そんなことよりほらー 漫画読もうぜ漫画ー」

「はいはい」

「うう」

印象度ダウン。

「むにむに」

むに。

「ほえあ～。じたなことしてみたいんだに」

そういうって鶯が俺に見せてくるのは、爆発の異能力が使われてい  
るシーン。

「ふつ」

鶯に似合はずぎだ。

「む」

「ああ、お前なら、こいつか出来ぬようにならぬよ

「むに。爆発少女鶯双櫻だに」

「あ、ああ」

自分が爆発少女って呼ばれてることを知つての言葉なんだらつか。

1冊。2冊。3冊。4冊。5冊。6冊。7冊。8冊。9冊。

「むに。飽きた」

ああ。こいつがこいつなるとは思つていたよ。飽きた。それも鶯双櫻  
の性質の一つである。

「なあ、どうすんだよ」これから。あいつがいたらどうしようつも無  
いぞ」

「分かつてゐるけど、鶯ちゃんに説明する訳にはいかないから普通にするしかないわね」

「に。なうに一人でコソコソしてゐるんだにっ！」

「あ、いや。その～」

「二人だけの世界……。むにむにだに」

「あ、あはは」

乾いた笑みしか出来ない。

「あら？ 鶯ちゃんも私達の世界に入る？」

「にわ！ まさかの３Pだに！」

「ちよ、何言ってんだよお前らー！」

「廻。顔が赤いわよ？」

「廻はうづぶだから仕方ないに」

「うつ。こいつら……。

あははと黒女は笑う。むににと鶯も笑う。意味不明である。

「そういえば、漫画飽きたんだろ？ ジャあお前の用つて何なんだよ」

「むに」

そう言つて鶯は、自分の読んでいた漫画を掴み

「漫画つてさ、有り得ない力ばつかりだよ。こんな現実で使われたらどうすればいいんだろうね？ ねえ、笑顔ちん？ ねえ、廻？ こんな力、実際に使われたらどう思う？」

「うつ……」

俺達に見せてきたページには、高速の水を発射する力が使われている。正に、チャラ男の

「干渉力」

鶯は、いつもの変質者ばかりな豊かな表情と違ひ全く無表情で言つ。

「双覗……。お前は誰だ？」

むにむにしているのは、人形だけ。

「笑顔ちんと廻が闘つた男が所属していた干渉者の組織『ヒの世

界』所属

『ランダムメイカ』

『非論理爆弾』」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3094f/>

---

ニセニセイギ

2010年10月28日08時23分発行